

# 3.11以後の 科学リテラシー no.84

牧野淳一郎 まきの じゅんいちろう

神戸大学大学院理学研究科惑星学専攻

福島県の甲状腺検査の本格検査1回目(検査2巡目)について甲状腺検査評価部会は、「有意差がでたやり方を捨てて有意差がでなかったやり方を採用する」という根本的に問題がある方法をとりました。これは「地域差がない」という結論ありきの解析で、非科学的というしかありません。本格検査2回目(検査3巡目)については、患者数が少ないため、地域差のあるなしの結論はでないと思えます。

前々回、前回は、宮崎・早野論文の研究不正に関する、福島県立医科大学(福島医大)、東京大学の調査報告についてその内容を見ました。どちらも、基本的に論文について指摘されている問題点のほとんどを検討せず、検討したものについては意図的なものではないと(特に根拠なく)主張することによって、不正ではない、と結論する、という構造をもつものでした。東大では近年多くの研究不正に関する調査報告がでており、不可解な判断になったものもいくつもあります。研究者が所属している(あるいは所属していた)研究機関が、秘密委員会を作って調査を行う、という現行のシステムの限界があらわになっているように思います。

さて、今回は、10月7日に開催された福島県の第36回「県民健康調査」検討委員会\*1までの、福島県の甲状腺検査関係の動きを取り上げます。4月号から8月号までの5回にわたって、「県民健康調査」検討委員会の下にある甲状腺検査評価部会における、本格検査1回目(2014~15年度に行われたもの)の解析結果について検討してきました。4月号では、地域差を見るのにUNSCEARによる

推定甲状腺吸収線量を比較対象にする方法を事後的に——すなわち、先行検査の段階やその前の調査設計の段階でなく、調査結果がでてから——採用し、それで「地域差なし」と結論するやり方の問題点を指摘しました。この委員会では、最初に、先行検査の時に使っていた4地域分類で本格検査の結果を解析し、大きな地域差がでてしまったため、検査間隔などで補正することで地域差を減らすことができないかと長期にわたって検討したあげく、甲状腺被曝量を正しく捉えているとは考えにくいUNSCEAR推定を使うことについて被曝量の影響はないと結論をだすことに「成功」したわけですが、UNSCEAR推定を使うと奇妙な結果がでる、というのは2014年11月号のこの連載で詳しく議論したところでした。後で述べるように甲状腺検査評価部会の関係者はこの連載の内容をチェックしているようなので、きちんと参考文献としてあげていただきたかったような気がします。

5月号では、この解析結果は明らかにおかしく、こちらでの検証結果に比べて過小なオッズ比になっていること、またエラーバーもデータ数から推測されるものに比べて異常に小さいことを指摘しました。そのあと、6月3日に開催された第13

\*1—<http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/kenkocoyosa-kentoinkai-36.html>